えると、学生達も、雪のなか、カードの入った重い箱をもって工学部までよく行ったものだと思います。逆行列のプログラムを学生が作り、小さい行列ならうまくいくのに、大きいものではめちゃめちゃな結果になってしまうのに、参ったこともありました。院生であったころはまだ言語は機械語かアナログでしたが、その頃はフォートランで、その後便利な言語が開発されましたが、私の知識はいまだにフォートランです。その後、田中勝人先生の努力で経済にカード穿孔機とリーダーが導入され、学生たちも工学部まで行かなくてもよくなりました。たいへんな進歩でした。

1980年の経済学部独立にはじまる大学改革で、修士課程設置、キャンパス移転、博士課程設置、大綱化による改組と続き、緊張の連続でしたが、経済のスタッフのまさに適材適所という協力の力強さには感じいりました。このプロセスで女性や若い同僚もふえ、経済学部の教育研究も幅と厚みを増しました。いま、大学は重大な状況に置かれていますが、経済のスタッフのかたがたが将来を切り開いていかれることを疑いません。最後に、若くして亡くなられた助手の前田恵美子さん、いまだに喪失感を拭えないでいる林宥一教授をはじめ、お別れした多くの先生がたを思い出すこと、しきりです。

（金沢大学経済学部教授）

CURES Report

サッカーW杯で日韓に問われる評価は

盛　　大　衛

2002年サッカーW杯がスタート

日本と韓国が共同開催するサッカーの2002年ワールドカップ（W杯）について、これまでの報道をもとに共催が抱える問題点や地球規模の祭典に地域がどのように関われるのか検証してみたいと思う。

1999年10月２日、ＦＩＦＡ（フィファ・国際サッカー連盟）理事会で大会会期が決定した。開幕戦は６月１日ソウル特別市で、決勝は同月30日横浜国際総合競技場と決まり、いよいよカウントダウンが始まった。

また、大会初の公式行事となる大陸別予選抽選会が12月７日東京国際フォーラムで開かれた。前回優勝のフランス、開催国の日本、韓国を除く195カ国・地域がエントリーして残り29の出場枠に挑む。注目を集めた欧州の抽選は厳粛な中にも緊張感がみ

なぎり地響きにも似た歓声でW杯のスタートを実感した。これまで世界のサッカーをリードしてきた一方の南米は、総当りリーグ戦のためこの３月から１年９か月に及ぶ長丁場の予選に入る。アジアの42カ国・地域も出場枠をめぐってボイコット騒ぎを起こしたが２．５枠で決着し、世界は2002年に向けて始動した。

キャンプ地に小松市と加賀市が立候補

日本は長いW杯の歴史の中で、前回98年のフランス大会が初出場だった。本大会の３戦全敗も悔しい思いよりこれが始まりだという気持で競技場を後にした。そのような歴史の浅い日本で、国の威信をかけて厳しい予選を勝ち抜いて本戦に臨む国々を受入れる体制が果たして整っているのか疑問も残るが、これを契機に地域としても何らかの形でW杯に参加しようとする気運が高まりを見せている。ベニュー（開催地）も日韓で20都市が確定し、転戦も余儀なくされることからキャンプ地の果たす役割が重要になってくる。ＪＡＷＯＣ（日本組織委員会）が募集した公認キャンプ地に石川県から小松市と加賀市が立候補した。ＦＩＦＡは「キャンプ地は卓越したコンディションとインフラ（環境基盤）を有するもの」としており、厳しい条件をクリヤーしなければならないが、全国から43都道府県83自治体が名乗りを上げた。98W杯での日本のキャンプ地エクスレバンは一躍知名度を上げた。しかし今回は、単純に計算しても半数が韓国でキャンプを張れば、国内で選ばれるのは16か所に過ぎない。小松、加賀両市とも市民挙げての誘致気運の盛り上げが大切になってくる。

巨大事業と日韓競争に対する評価は

アジアでの初開催、加えて初の共催という難題を抱えての船出だが、１月の総理府の世論調査によると、韓国に「親しみを感じる」と答えた人が48.3%に達し、「感じない」をはじめて上回ったと報じている。日本と韓国の特殊な関係に対する配慮に欠けたＦＩＦＡの政治的決断や高圧的な態度にも拘らず、協力関係は着々と進められている。が、メディアを始めとした目はことごとく日韓を比較することになるだろう。強化と成績に始まり、施設や運営、入場券問題と観客動員、破格の放映権料と視聴率、サポーターとボランティア、フーリガンとセキュリティ、アクセスと交通、民営と国営等々、ここで個々に触れる紙数はないが、お互い負けたくないと思うのが本音だろう。しかし、2002年W杯で真に問われるのは何なのか。経済波及効果で判定されがちであるが、世界の目はもっと怖く、スポーツを文化として捉える成熟度で評価するのではないかと思えてならない。

（金沢大学経済学部教授）